

# 三毛作詞の音楽アルバム『回声』について

間                      ふ さ 子\*

## 01 はじめに

中国人の世界で最も知られているポピュラーソングの一つに『橄欖樹』という歌がある。

不要問我從哪裡來	どこから来たのか訊かないで
我的故郷在遠方	私の故郷は遙か遠く
為什麼流浪	なぜにさすらう
為什麼流浪遠方	遠くをさすらう
為了我夢中的橄欖樹	それは夢にみた橄欖樹のため

この歌はもともと 1979 年に台湾で発表された<sup>1</sup>ものだが、大陸でも広く人々に愛唱され今日に至っている。その歌詞の一節を題名とした「不要問我從哪裏來」という小説がある<sup>2</sup>ことから、その中国人社会への浸透ぶりがうかがえる。この歌を作詞したのが本稿で取り上げる台湾の作家・三毛である<sup>3</sup>。

\* 福岡大学人文学部講師

<sup>1</sup> 李泰祥作曲・齊豫歌唱。アルバム『橄欖樹』（滾石唱片公司）所収

<sup>2</sup> 蔣濮が『上海文学』1988 年 10 月号に発表した作品。日本に留学してきた中国人の異境での挫折と彷徨を描いている。作者書き下ろし原稿による邦訳は久保田美年子・松本みどり訳『何処から来たかは聞かないで』白帝社 1989 年

<sup>3</sup> 橄欖樹とはオリーブの木のこと。ただし彼女自身はこの歌詞の一部には他人の手が入っており、完全には自分の作品ではないと言っている。（三毛「我的写作生活」『夢裡花落知多少』1981 年）

三毛はその出世作『撒哈拉的故事』（サハラ物語<sup>4</sup>）を始めとする一連の著作で、1970年代後半の台湾・香港のみならず、1980年代以降の大陸においても「三毛フィーバー」を巻き起こし、とくに若い世代の読者に熱烈に支持された。彼女は1991年に自らの命を絶ったが、死後15年経った今でも、三毛の作品は依然として一定の読者を擁している。

本稿は、三毛の作詞になるコンセプトアルバム『回声』（85）について、いくつかのキーワードを用いてその特徴を整理し、それに託されたメッセージを探ろうとするものである。

## 02 三毛という作家

三毛は本名・陳懋平<sup>5</sup>、1943年3月26日に抗日戦争下の中国の臨時首都・重慶で生まれた。その後、弁護士であった父に従い、家族と共に南京を経て1948年に台湾に移った。いわゆる「外省人」である。

「引きこもり」の子ども時代を経て、中国文化学院（現・中国文化大学）の聴講生となり、その後スペインに留学した。さらにドイツ・アメリカなどに遊学、1970年に一旦台湾に帰るが、ドイツ人婚約者が急死したため、その傷心を癒そうと再びスペインへ行き、そこでのちに夫となるホセに再会した。1973年にサハラ砂漠で結婚。1974年に「三毛」のペンネームで「中国飯店<sup>6</sup>」を台湾の新聞に発表、注目された。

西サハラ紛争のため1976年にカナリア諸島へ移住し、そこでサハラ砂漠やカナリア諸島で出逢った人々や出来事にまつわる作品を書いては台湾の新聞・雑誌に発表した。これらの作品によって「三毛」は台湾・香港・東南アジアな

---

<sup>4</sup> 邦訳は妹尾加代訳『サハラ物語』筑摩書房1991年

<sup>5</sup> 「懋」の字は陳家の家譜において彼女の世代を表す文字だが、難しすぎるといって三毛自身が三歳のとき自分で取ってしまい、それ以降「陳平」という名で通っていた。（陳嗣慶「我家老二——三小姐」『鬧学記』序、1988年）

<sup>6</sup> のち最初の作品集『撒哈拉的故事』に収められる際「沙漠中的飯店」と改題された。

どの中国人社会で一躍人気作家となる。

1979年9月に夫が水難事故で死亡。1981年に台湾に戻り母校で教鞭を執るかたわら執筆活動を行っていたが、健康上の理由で教職を辞したのちは、執筆と講演を中心に活動した。1989年には40年ぶりに大陸へ里帰りし念願だった先祖の墓参りを果たした。1991年1月4日に検査入院中の病院で縊死、享年48才であった。

「三毛」というペンネームは、「中国飯店」を発表する際に適当につけたものだったらしいが、彼女が幼い頃に南京の家で読んだ張楽平の漫画『三毛流浪記<sup>7</sup>』の主人公である孤児の「三毛」のイメージがあったのは確かなようだ<sup>8</sup>。

彼女の作品は、生前発表された作品集が十四冊、音楽アルバムが一つ、死後編まれたものや翻訳などを含めてもそう多くはない。彼女の作品の際立った特徴は、ほとんどすべてにおいて一人称が用いられていることである。これについて彼女は「私は『我執』が強い書き手で、自分ではなく別の人を書けといわれたら、手も足も出なくなります。私の五冊の本のうち、三人称の文章はひとつもありません<sup>9</sup>」と述べている<sup>10</sup>。しかもほとんどが短篇か中篇で、長編と呼べるものは、彼女が最晩年に手がけた作品である映画の脚本『滾滾紅塵<sup>11</sup>』のみである。

一人称で書かれた彼女の作品がフィクションであるかどうかについてはさまざまな議論があるが、彼女の「ストーリーテリング」の才能は家族がこぞって認めるところであり、日常の瑣事が彼女の筆によって自らを主人公とした伝奇に仕立てあげられているさまは、確かに見事な手腕であり、その点からいえば

<sup>7</sup> 張楽平が1947年に発表した人気漫画。

<sup>8</sup> 三毛「逃学為読書（代序）」『背影』1981年

<sup>9</sup> 「両極対話—沈君山與三毛」『夢裡花落知多少』1981年

<sup>10</sup> 実際にはこの発言の時点で、第二作品集『雨季不再來』に収められた初期の習作の幾つかが第三人称を用いて書かれており、その後、シナリオ『滾滾紅塵』でも第三人称が用いられた。

<sup>11</sup> 監督・嚴浩、主演・林青霞、秦漢1990年。

彼女は立派な創作者だと言える。

### 03 読者の三毛像

『撒哈拉的故事』で台湾の読者の前に彗星のごとく登場したときの三毛は、「一見弱そうだが実はとても強い<sup>12</sup>」、「本当に生活をしてきた人<sup>13</sup>」、「スカートを穿いたユリシーズ<sup>14</sup>」などと評されていた。スペイン留学、サハラ砂漠移住、外国人との結婚…国民党の強権政治が続く閉塞的な社会に生きる1970年代の台湾の人々の目には、彼女は社会の枠にとらわれず自由に生き真摯に愛を求める強き女性に映った。「三毛が成功を収めたのは、主にその伝奇的色彩に富んだ経歴と慈愛に満ちた気丈な性格によるところが大きい<sup>15</sup>」

そしてそのイメージは、文革が終わり改革開放政策が導入された1980年代初頭の中国大陸の若者に引き継がれていった。

大陸では1981年頃から三毛作品が雑誌などで紹介され始め、1983年に福建人民出版社から出版された『三毛作品選』（張默芸編）は一大ベストセラーとなった。その後海賊版も含め彼女の作品がつぎつぎに簡体字版で出版され、「三毛フィーバー」が巻き起こった。

三毛は中国大陸の若者に、彼らが知らなかった「別の世界」を描いてみせたのである。ふるさとを離れ異境の地にあってみずからの手で人生を築いていく三毛は、現状に不満を抱きここではないどこかへ行きたいと願っても、制度に縛られ自分の土地から離れることのできない彼らにとって憧れの存在であり、彼らに代わって行動してくれる人であった。

1980年代に三毛が大陸の若い読者を魅了したのは、これまで考えられなかった生き方の手本を彼らに示したことと無関係ではない。大陸の読者たちは三毛

---

<sup>12</sup> 彭歌「沙漠奇葩」『溫柔的夜』序1979年

<sup>13</sup> 薇薇夫人「真正生活過的人」同上

<sup>14</sup> 痲弦「穿裙子的尤里西斯」同上

<sup>15</sup> 何慰慈「我所知道的三毛」『廣州文芸』1981年3期33頁

以前に、これほどロマンティックで反抗精神に富み、情があって異国情緒にあふれた文章を読んだことがなかった<sup>16</sup>。

ところが彼女は、中学二年の時、学校の教師の心ない仕打ちに深く傷つき、不登校になったという過去を持っていた。砂漠でたくましく生きる「行動者」のイメージに、「不幸な少女時代を送り、その逆境を克服した人」というイメージが加わり、若い読者はますます三毛に魅了されていった。

さらに彼女の生い立ちが世に知れるに従い、その「自由人」のイメージから、「さすらいびと」のイメージが生み出されていった。台湾の外省人であること、正規の学校教育からドロップアウトしたこと、外国を転々としていること、それに加えて、本稿の冒頭で紹介した『橄欖樹』の歌詞が、三毛の「さすらいびと」のイメージを定着させたと言っていい。中国人であれば、三毛の著作を読んだことはなくても、『橄欖樹』の歌は耳にしたことがあるはずだからだ<sup>17</sup>。

三毛の主要な読者層を形成する大陸の若者にとって、彼女は「家を捨て、愛を求め、世界を流浪し、自らの行動で青春の夢を实践した人<sup>18</sup>」であり、そのイメージは現在も基本的には変わっていない。

#### 04 『回声』について

このアルバムは1985年に滾石唱片公司（ロック・レコード）から発売された。最初は音楽テープの形式であったが、のちCD化された。プロデューサーは齊豫と王新蓮、いずれも台湾の女性ミュージシャンである。収録された楽曲は11曲。三毛が作詞した歌詞に、当代の著名な作曲家7人が曲をつけ、齊豫と潘越雲という二人の人気女性ヴォーカリストが歌唱した。アルバムは「三毛作品第15号」と銘打たれており、彼女の一連の作品の一つと位置づけられて

<sup>16</sup> 王麗瓊「三毛：一個不老的伝説」『博客網』書評サイト  
<http://xz.bokee.com/68/2005-09-11/34780.html>

<sup>17</sup> 何慰慈前掲文章 32頁

<sup>18</sup> 王麗瓊前掲文章

いることがわかる。

このアルバムのために三毛はかなりの数の歌詞を書いたが、滾石側はもっとびったりくる言葉がほしいと言って悉く書き直しを求めてきた。その真摯な態度に感服した彼女は「頭が爆発しそうになるくらい必死になって表現を探しもとめ、一つのフレーズに五百種以上の書き方を考えたのちようやく定稿とすることがしばしばだった<sup>19</sup>」。このとき彼女は台湾に9ヶ月間帰省中で、作品集『傾城』など三冊の本の出版準備と翻訳を一本抱えていた。アルバムのための作詞はこれらの仕事と同時進行で行われたが、彼女はそれに全力で取り組んだ。あまりの忙しさに一時記憶喪失状態となり、ついには脳神経内科に入院、退院後療養のためすぐさま台湾を離れたほどであった<sup>20</sup>。

『回声』は、彼女が最も多忙であった時期に——それは、夫の死によって失われてしまった生きる意欲をなんとか取り戻そうとして自ら課した忙しさであった——再生を模索して作られた詩作品群なのである。

#### 04-1 アルバムの構成

題名の『回声』とは「こだま」という意味の中国語である。「回声＝こだま」は英語では「echo」、三毛は英語名を Echo CHAN と名乗っていた。つまりこのタイトルは自らを指しているわけである。そしてその名に違わず、内容はみずからの半生の歩みを歌ったものである。『回声』は四部構成となっており、各パートにおいて彼女の人生のそれぞれの段階——(A) 不登校・引きこもりの子ども時代、(B) 初恋と失恋、婚約者の死、(C) 砂漠への移住、結婚、夫との死別、(D) 再起への歩み——が歌われる<sup>21</sup>。

<sup>19</sup> 三毛「我要回家」『鬧学記』1988年

<sup>20</sup> 同上

<sup>21</sup> 『回声』CD ライナーノートによる。ただ、このアルバムには本文中の表に示したとおり四カ所彼女自身の「傍白」が収められており、そこを区切りだと考えて、その傍白の内容から以下のように分けることも可能である。(A)①②③④⑤：青春時代、(B)⑥⑦：ホセとの愛の日々、(C)⑧⑨：失意と孤独の時期、(D)⑩⑪：旅立ちの予感。

『回声』の構成を以下の表に示す。

パート	No	題 名	傍白	作曲者	歌唱者
(A) 子ども時代	①	軌外 [軌道の外]	○	李泰銘	潘越雲・斉豫
	②	謎		翁孝良	潘越雲・斉豫
(B) 初恋と失恋、婚約 者の死	③	七點鐘 (今生) [七時 (この世)]		李宗盛	斉豫
	④	飛 [飛ぶ]		李宗盛	潘越雲
	⑤	曉夢蝴蝶 [朝に蝴蝶を夢みる]		陳志遠	潘越雲
(C) 砂漠への移住、結 婚、夫との死別	⑥	沙漠 [砂漠]	○	李泰祥	斉豫
	⑦	今世 [今生]		李泰祥	斉豫
	⑧	孀 [未亡人]	○	陳揚	斉豫
(D) 再起への歩み	⑨	說給自己聽 [自分に語りかける]		李泰銘	潘越雲・斉豫
	⑩	遠方 [遠く]	○	王新蓮	潘越雲
	⑪	夢田 [夢の畑]		翁孝良	潘越雲・斉豫

そもそも中国において「詩」とは「志を言う」ものであった<sup>22</sup>。この「詩言志」の伝統は近現代詩においても基本的に守られていた。たとえば北島・顧城・舒婷など、文革期のいわゆる知識青年たちが書いた詩は、何が言いたいのかわからないという意味で「朦朧詩」と呼ばれたが、彼らの作品も基本的には社会を志向して書かれている。

ところが三毛の『回声』はそういった「詩言志」の伝統とは全く異なる地平に位置している。彼女が歌うのは「自分の内面」のみであり、愛情の対象である「你 (あなた)」ですら、彼女が捕捉しえない不確かな存在としてしか登場しない。ましてや彼女の視線が社会へと向けられることもない。11編すべてが徹頭徹尾「我 (わたし)」を歌ったものであり、これは中国の詩歌の伝統か

<sup>22</sup>『尚書・舜典』に「謂詩言志以導之、歌詠其義以長其言」(詩は志を言いて以て之を導き、歌は其の義を詠じて以て其の言を長うするを謂う) とある。

から見ればかなり異端だと言える。

## 04-2 三つのキーワード

『回声』にはいくつかの言葉が印象的に使われている。その主なものは「自己」・「等待」・「夢」である。この項ではこの三つの言葉を手がかりに『回声』に託されたメッセージを探ってみたい。

### ①「自己」

前述したように『回声』は徹頭徹尾三毛の内心の声を歌ったものである。つまりここでも彼女がデビュー以来堅持してきた一人称「我（わたし）」は変わることはない。

「七点鐘」にはこういう一節がある。初恋の相手から待ちに待った電話が掛かってきたとき、彼女は受話器に向かい、息せき切ってこう言うのだ。「私よ、私よ、私—私私私よ」

鈴聲響的時候

自己的聲音那麼急迫

是我、是我、是我

— 是我是我是我

（傍点筆者）

一見すると実に強烈な自己アピールである。彼女の作品はすべてこの強烈な自意識に支えられている。ただその自意識は自己肯定ばかりでなく自己否定の場合も少なくない。自分の弱さや迷いを彼女は隠そうとはしない。これが彼女の言葉を借りれば「我執」ということになるのだろう。

その結果、彼女の視線は外界へは向かわず、自己の内側へ内側へと向かう。



さらに「自己（自分）」という言葉を用いることにより、他者と区別されるものとしての「自分自身」を強調する。たとえば、最初の楽曲「軌外」は不登校になって家に引きこもっていた時期を歌ったものだが、その中に次のような一節がある。（傍点筆者）

哪家的孩子不上學      どの家の子だって学校に行く  
 只有你<sup>●</sup>自己<sup>●</sup>自己<sup>●</sup>最瞭解      あなた自身が一番わかっていた

ここで作者は、「你（あなた）」という言葉を使っている。「你」というのは第二人称だが、中国語では自分を客観化する場合にも使う。つまり作者はここで自分自身のことを客観的に語っているのである。さらにそのあとに「自己」ということばを繰り返して、そのことを一番わかっていたのは他でもない自分自身なのだということを強調している。

三毛が子ども時代を過ごした 1950～1960 年代の台湾では、大陸の共産党政権に対抗し、自らの正統性を主張するため、国民党によって中華文化の伝統が強調され、儒教道徳が重んじられた。教師の権威は絶大で、学校で学ぶのは将来社会の役に立つ人物になるためであり、小説を読んだりするのは邪道だと教えられた。

だが三毛は、勉強はもとより寝食さえも忘れて古今東西の文学作品を読みふける。しかも彼女の将来の夢は「ゴミ拾い」になることであった<sup>23</sup>。

その一方で、彼女の理性は、自分の生きる社会の価値観に照らせば、きちんと学校に通って勉学に励むのがよい子であり、自分もそうあるべきなのだと了解していた。ところが、どうしても心と身体がそれを拒否するのである。自分が軌道はずれた人間であるという劣等感に苛まれ、彼女は自室に引きこも

<sup>23</sup> 三毛「拾荒夢」『背影』1981年

り、ついには台湾社会から脱出をはかる。

読者の目にはそれが彼女の勇氣ある「反抗」だと映り、喝采した。だが彼女にとってそれは誇るべき行動ではなく、後ろめたい逃避であった。だからその行動を賛美し模倣しようとする読者の存在は彼女を当惑させた。三毛の中には、「孝」をはじめとする儒教道徳を「是」とする觀念がずっと存在しており、それを否定する気は毛頭なかった。むしろそれに従えないことは自分の「非」であると考えていたのではないか。そのことがこの歌詞からは読み取れる。

小小的雙手	小さな両手で
怎麼用力 也解不開	どれほど力をこめてもほどけない
是個壞孩子的死結	悪い子という固い結び目

また、見方を変えれば、これは第一人称の自分が第二人称の自分に語りかける構図でもある。

この「自分に語りかける」という構図がはっきりと示されているのが「説給自己聽」と題する歌詞である。

讓我說給妳聽吧	あなたに話して聞かせたい
但願——	できることなら
醒來 已不在這個世界	目覚めたとき この世界にいたくない
去了去了 不帶一支髮夾	さあ行くわ 髪留め一つも持たないで
明天的星星	明日の星は
不是掛在這一邊	こちら側には懸かっていないから

讓我說給妳聽吧	あなたに話して聞かせたい
從來 知路的候鳥不迷航	道を知る渡り鳥は迷わないもの

去吧去吧 不要帶任何心情 行きなさい 何の気持ちも抱かずに  
 明天的星星 四面八方 明日の星は あたり一面に

讓我說給妳聽吧 あなたに話して聞かせたい  
 讓我再說給妳聽吧 あなたにもっと聞かせたい

実は『回声』と同じ年に出版された作品集『傾城』に同じ題名の文章が収められている。

夫の死から三年、カナリア諸島の家を引き払って台湾に戻った翌朝、久しぶりの熟睡から目覚めた三毛は、ベッドの中でもう一人の自分 ECHO に語りかける。それは夫の死以来久しぶりに自分と向き合う時間だった。

彼女は自分の経験した不幸を、すべての人が多かれ少なかれ生きてきた道だと語り、もしあなたが自分の生命を大切にしないのなら生きる機会は訪れない、本当にやりなおしたいと願うのなら、「私は過去から解き放たれた」と思うことが必要だ、と言う。解き放たれることは過去を忘れることではない。「私たちはなにも捨てない、記憶ですらも」そうやって自分を説得する<sup>24</sup>。

彼女が自分自身に、命を大切に生き延びよとひたすら語りかける言葉の向こうには、来るべき新しい生活に恐れを抱き必死で身構えている姿が垣間見える。言葉が積極的であればあるだけ、心に抱えた闇の深さが感じられる。

では、『回声』に収められた歌詞の方はどうだろうか。おそらく散文の方が先に書かれ、そのあとこの歌詞が書かれたのであろう、散文の内容を沈殿させた上澄みの部分が韻文化されており、旋律の影響もあるだろうが、肩いからせた必死の思いというより、静かな決意（もしくは諦念）を自分に語りかけているように感じられる。

<sup>24</sup> 三毛「説給自己聽」『傾城』1985年

## ②「等待」

前述の通り、三毛の読者たちは彼女に対して、粹にとらわれず自分の意のままに生きる自由人のイメージを抱いている。確かに夫のホセと共にサハラ砂漠やカナリア諸島で暮らしていた頃までの彼女の作品には、そのようなイメージを喚起する要素が非常に多い。

ところがこの『回声』ではそういう三毛像は影をひそめている。むしろ、「等待（待つ）」、「守（見守る）」、「盼（待ち望む）」という言葉が多用され、運命を甘受して耐える女性のイメージが繰り返し歌われる。

以下に「待つ」という意味の語が使われているフレーズを列挙する。（傍点筆者）

- 今生的起步／要等到什麼時候（「謎」）  
この世界で歩き出せるときは／いつまで待てばやってくるのだろう
- 守住電話／就守住度日如年的狂盼（「七点鐘」）  
電話を待ちわびた／一日が一年にも感じるほどの狂おしい期待を抱いて
- 我不怕等待／你始終不說的答案 但是…（「飛」）  
待つことは怖くない／あなたが口にしない答えを でも…
- 只等待 等待／時間給我一切的答案（「曉夢蝴蝶」）  
ただ待つ 待つだけ／時間がすべての答えを与えてくれるのを
- 你忘了忘了 那一次又一次水邊的淚與盼／你忘了岸邊等你回家的女人（「今世」）  
あなたは忘れてしまった 幾度も繰り返された水辺の涙と期待を／あなた

は忘れてしまった 岸辺で帰りを待つ女を

- ・**等待**是織布機上の銀河／織啊織啊 織出渡河的小船（「孀」）

待つことは織機の上の銀河／織って織って 河を渡る小舟を織りだそう

ここで歌われるのは読者におなじみの行動者・三毛ではなく、ひたすら何かを待ちわびる三毛であり、それは読者にとっては見慣れぬものであったろう。もしくは、読者がよく知っている快活で健康的で生への希望に満ちていた三毛こそが幻影だったのかもしれない。そう思わせるほど『回声』における三毛は受動的・静的なイメージが強い。

これは創作された時期の彼女の状態によるものであるが、三毛という人の矛盾がここでも伺える。先にも述べたように、台湾の儒教的倫理観の世界にいると、彼女は周りの価値観に合わせていけない自分に気付いて息苦しさを感じ出す。子ども時代は引きこもればよかったが、大人になり社会的地位ができてしまうと、そういうわけにはいかず、したくないことまでしなければならぬ。それが精神的な負担になり、動きがとれなくなっていく。それから逃れるには、台湾以外の場所に行くしかない。台湾以外の場所に行けば彼女は生氣を取り戻し、自分に自信を持つことができるのである。

『回声』が創作された時期は、前項でも述べたように、台湾社会で生きていくという決意をした時期と重なる。だがそれは彼女が心底願っていたことではなかったのかもしれない。それが「待つ」という消極的な言葉の多用によって問わず語りに語られているのではないだろうか。

### ③「夢」

三番目のキーワードは「夢」である。「夢」というのは三毛が好んで使う言葉の一つで、作品の題名だけ見ても、「夢裡不知身是客<sup>25</sup>」、「夢裡花落知多

少<sup>26</sup>」、「夢裡夢外<sup>27</sup>」、「驚夢三十年<sup>28</sup>」など「夢」の字を持つものが多数ある。

彼女のいう「夢」とは、多くの場合が「現実」に対比される境地である。それは夜の夢であることもあれば白日夢である場合もある。彼女は夢境で過去に遊び、やすらぎ、慰められる。

『回声』でもいくつか「夢」という言葉を使った箇所がある。まずは「七点鐘」。ここでは、初恋の人の前に自分が立っていることを「夢」ではないか、幻ではないかと恐れていたと歌う。

明明站在你的面前 還是  
害怕這是一場夢  
是真 是幻 是夢 是真是幻是夢

「曉夢蝴蝶」という作品では、タイトルの「夢」は「夢みる」という動詞である。目覚める間際の朝の夢で、空いちめに舞う色鮮やかな蝶が彼女の枕辺に飛んできて「これこそ朝（あした）に生き暮（ゆうべ）に死すこと」だと語った、と歌う。ここには莊子の「蝴蝶の夢」からの連想がある<sup>29</sup>。

曉夢裡 滿天穿梭的彩蝶  
撲向枕邊 說  
說 這就是朝—生—暮—死

また最後の楽曲である「夢田」は、彼女のこれからの「夢」を歌う。二人の

<sup>25</sup> 「夢裡不知是身客」は南唐・李煜の詞「浪淘沙」の一節。『送你一匹馬』（1983年）所収。

<sup>26</sup> 「花落知多少」は唐・孟浩然的絶句「春曉」の一節。『夢裡花落知多少』（1981年）所収。

<sup>27</sup> 『夢裡花落知多少』（1981年）所収。

<sup>28</sup> 「驚夢」は昆曲『遊園驚夢』に由来するが、ここでは白先勇の短篇「遊園驚夢」（『台北人』所収）を踏まえて使われている。『送你一匹馬』（1983年）所収。

<sup>29</sup> 『莊子・内篇』「齊物論篇第二」

女性歌手の美しい二重唱である。

毎個人心裡一畝 一畝田 誰もが心に畑を持っている  
 毎個人心裡一個 一個夢 誰もが心に夢を持っている

那是我心裡一畝 一畝田 それは私の心の一枚の畑  
 那是我心裡一個 不醒的夢 私の心の 醒めることのない夢

ここの「夢」を将来への希望と理解すれば、ここに歌われているのは再生への希望である。もしこの「夢」を、他の二首と同じく現実と対比される「夢境」と理解すると、また少し味わいが異なってくる。それは、これから彼女が立ち向かわなければならぬ現実から逃避することのできる場所を意味し、その場所の存在を自分の心のよりどころとしているのだと読めてくる。おそらくこの歌における「夢」は、この二つの意味を併せ持つのであろう。

何はともあれ、彼女は最後の歌で、もう一度「タネを植える」という行動を起こすことを皆に伝えた。それが現実の場所であるのか、夢の境地であるのか、それはこの時点ではおそらく彼女自身にもわかっていなかったであろう。

以上、三つの言葉を手がかりに、『回声』に託されたメッセージを探ってみた。そこから見えてくるのは、彼女の読者が抱いているイメージとはかけはなれた三毛の姿である。読者たちが魅了された「反抗精神」は三毛にとっては罪悪感を抱きながらのやむにやまれぬ行動であり、砂漠で「白手起家<sup>30</sup>」した強き女性のイメージは影をひそめ、ただひたすら「待つ」女がいる。さらには生活者三毛ではなく夢境にあこがれる三毛が歌われる。まるで三毛が、これまで

<sup>30</sup>『撒哈拉的故事』（1976年）所収。「白手起家」とは全くの無一文から家を興すことをいう。

の自分はもうすでにいない、あるいはそもそもが幻だったのだと告げているかのようだ。

加えて筆者が読み取ったものは、三毛にとって決して居心地の良い場所ではない台湾というところで、かつて彼女を束縛していたしがらみと闘いながら生きていくしかないのだ、という諦念と決意である。台湾に戻るという選択をさせるほど、夫を亡くした彼女の孤独は深かったし、中国社会との絆はついには断ちがたいものであった。

新しい一歩を踏み出すために、彼女は自分の来し方を振り返り、さまざまな思いを沈殿させ、その上澄みを韻文化して、二人の女性歌手の歌声に託した。

#### 04-3 こだま

これまで『回声』に歌われる三つの印象的な言葉を見てきたが、最大のキーワードは、実は題名にはっきりと示されている。それは『回声＝こだま』である。

そもそも「Echo」という英語名は彼女が不登校であった時代に自分でつけたものだという。学校へ行っていない彼女は、画家の顧福生<sup>31</sup>のアトリエに絵を習いにいくことになる。顧先生は彼女に自分の好きなものを描くように言った。

その絵は明らかに自分のものではなく、先生の絵を真似たものだったが、寛大な先生は何も言わなかった。私は絵の右下の隅に、自分でつけた名前——ECHOをゆっくりと書き付けた。こだま、である。ギリシャ神話で、水仙の花に片思いをしたあのニンフの名前であった。<sup>32</sup>

---

<sup>31</sup> 1935年上海生まれ。台湾師範大学美術系卒業。当時台湾画壇の前衛であった「五月画会」のメンバーであった。1961年に渡仏、その後アメリカに渡った。顧祝同將軍の次男。

<sup>32</sup> 三毛「我的三位老師」『我的快樂天堂』1993年



『回声』の中には多数の繰り返しが使われている。歌詞であるためリフレインが多用されても不思議ではないし、「反復」はもともと中国文の基本的な修辭法であり、中国人である三毛にとっては非常に身近な技巧であっただろう。だが、それらを差し引いてもやはり繰り返しが非常に多い。それは同じ語の繰り返しの場合もあれば、言葉を少し変化させたうえでの反復である場合もあるし、時には「対句」の形式を取るものもある。

「今世」という歌詞を例として以下に掲げる。繰り返しの部分は傍点で、対句の部分はアンダーラインで示した。「反復」・「対句」といった繰り返しの技巧が多用されていることは一目瞭然であろう。

聽不見 狂吹的風沙裡  
在說什麼古老的故事  
那一年 那個三月  
又一次 地老天荒

聞こえない 吹きすさぶ砂嵐のなか  
古い物語など語っていても  
あの年 あの三月  
そしてあの 悠久の歲月

花 又開了 花開成海  
海 又昇起 讓水淹沒

花が 咲き 花の海となり  
海が 隆起し 水に沈められ

你來了來了  
一場生生世世的約會  
我不再單獨走過秋天

あなたは来た やって来た  
前世が定めた逢瀬に  
私はもう一人で秋を過ぎさない

不是跟你說過三次了嗎  
我是一—you的一天使  
不在你身旁的時候  
不可以不可以

あなたに三度言ったはずよ  
私は一あなたの一天使  
あなたのそばにいない時  
だめよ だめよ

跟永恆去拔河

你忘了忘了 忘了忘了  
那一次又一次  
水邊的淚與盼  
你忘了  
岸邊等你回家的女人

日已盡 潮水已去  
皓月當空的夜晚  
交出了  
再不能看我  
再不能說話的你  
同一條手帕  
擦你的血濕我的淚

要這樣 跟你血淚交融  
就這樣 跟你血淚交融  
一如 萬年前的初夜

永遠と綱引きをしては

あなたは忘れた 忘れてしまった  
幾度も繰り返された  
水辺の涙と期待  
あなたは忘れてしまった  
岸辺で帰りを待つ女を

日は沈み 潮は引き  
銀の月が空にかかる夜  
私は引き渡した  
二度と私を見ることのない  
二度と話をする事のないあなたを  
同じハンカチが  
あなたの血をぬぐい私の涙でぬれた

どうしたら 血と涙はとけ合えるの  
こんな風に 血と涙はとけあったわ  
一万年前の初夜と同じに

この繰り返しこそが「回声＝こだま」の効果である。この効果を用いて三毛の情念（我執と言い換えてもいい）が繰り返し歌われる。

さらに言えば、「回声＝こだま」というのは自らが発した言葉に自らが応える、つまり「自らが自らと対話する」ことに通じる。これは「自己」というキーワードのところでも述べたが、このアルバムの最大の特徴は、おそらくこの「自らとの対話」であると言える。

自らと対話しながら、自分を見つめなおし、励まし、再起への道を探し出そうとしている三毛、『回声』に綴られた歌詞の中からそんな彼女の姿が浮かび上がってくるようだ。

#### 04-4 『星の王子さま』

『回声』にはもう一つ非常に大きな特色がある。それはサン＝テグジュペリによって書かれた『星の王子さま』（中国語題は『小王子』）の影響である。

三毛が『星の王子さま』を愛読していたことはよく知られている。彼女と『星の王子さま』との出会いがいつだったのかは定かではないが、台湾で最初に出された中国語訳は、1969年の陳千武による内藤濯訳からの重訳であり、1971年になってフランス語からの翻訳が出版された<sup>33</sup>というから、彼女が何語で読んだにせよ、初めて『星の王子さま』に接したのは成人してからのことであったのは間違いないだろう。三毛の傾倒ぶりには、自分が『星の王子さま』の世界に入り込んでしまったかのような観がある<sup>34</sup>。

『回声』に収められた「沙漠」という歌詞の詞書には次のように書かれている。

「其實，沙漠真正的美，還是因為那些隱藏的水井」

（「沙漠が美しいのは、どこかに井戸をかくしているからだよ<sup>35</sup>」）

カギ括弧でくくられたこの言葉は「王子さま」の言葉そのものであり、歌詞の本体のほうにも「沙漠化為一口水井／井裡面／一雙水的眼睛／盪出一抹微笑」（沙漠は一つの井戸となった／井戸の中には／水の双眸が／かすかな笑みを湛えている）というフレーズがある。世界各地を流浪していた三毛がついに

<sup>33</sup> 蘇愛琳『『小王子』的幾個探討方向』台東師範學院兒童文學研究所修士論文 1999年

<sup>34</sup> 森怜奈『『星の王子さま』その日本・台湾・大陸における受容をめぐる』福岡大学人文学部東アジア地域言語学科 2006年度卒業論文

<sup>35</sup> 岩波書店 2000年版の内藤濯訳による

砂漠にたどりつき、そこに精神のよりどころをみつけていったようすが歌われる「沙漠」という歌詞が『星の王子さま』からの連想を交えて書かれたことは明らかである。

また、前出の「説給自己聴」に付された詞書は、以下のように結ばれている。

寫這首歌的時候只想到一條蛇，那條可以將我送到彼岸去的蛇。

(この歌を書いたとき蛇のことだけが想われた。私を彼岸へ届けてくれるあの蛇である)

『星の王子さま』では、飛行士が王子さまと一緒に砂漠の中の井戸をみつけたあと、王子さまは黄色い毒蛇に、彼を噛み殺して自分の星に送り返してくれるよう頼む。ここで三毛が言う「蛇」が、王子さまを殺して星に届けた蛇のことであることは間違いない。

彼女をサハラ砂漠に向かわせたものは「前世の郷愁」であると彼女は「沙漠」の傍白で語っている。『星の王子さま』が書かれたのは1943年、三毛が生まれた年であった。もしかしたら三毛は自らをひそかに王子の生まれ変わりに擬していたのかもしれない。

そうだとすれば、『回声』の第四部分で再生への期待を歌った三毛だったが、いずれは自分の星（三毛が言うところの「彼岸」）へ戻っていくのは、この時点で定められていたことだったのだとも言える。

## 05 『回声』のあと～おわりに

1986年、三毛はグラン・カナリア島にあった家を処分して本格的に台湾に居を定めた。だがさすらいことをやめ、儒教道徳の社会に戻った彼女は、創作の源泉を失ってしまい、その後の彼女の筆からは初期の作品のような魅力的な作品は生み出されてこなかった。

三毛は自らの中国人という出自を大切にしていた。恵まれた環境で育ち、両親に対しても深い愛情を抱いていた。そのことは彼女の作品の端々に読み取れる。だが彼女は、彼女が受けた儒教道德の枠の中で生きていくことができなかった。そのことで自己否定に陥っていた彼女を救ったのが、夫のホセであり、砂漠だったのである。砂漠で彼女は再生した。

夫が不慮の事故で亡くなったあと、三毛はずっと死を思っていた。その彼女をこの世に引きとどめたのは、皮肉なことであるが、おそらくは儒教の「孝」の観念だったと筆者は想像する。親より先に逝くことは「不孝」である、と儒教道德は教える。三毛はともかくも夫のあとを追わず、台湾の両親のもとへ戻ってきた。そこで生きることを決意したのである。

そのとき彼女は自分にこう言い聞かせた。「すべきことをするのを勇氣と呼ぶなら、すべきでないことをしないことも勇氣だ」、「人の心を傷つけることを恐れて自分を犠牲にしてはならない」<sup>36</sup>と。彼女には自分を苦しめるものが何だったのかよくわかっていたのであろう。

思えば彼女が一生をかけて愛読した『紅樓夢』は浮き世を捨てる「出世」の物語である。彼女が好んだ『星の王子さま』では、王子はこの世で死ぬことによって自分の星へと戻っていく。一旦は「孝」の観念によって親に先立つことを思いとどまった三毛だったが、結局は両親を残して一人で彼岸に旅立った。『回声』を創作したのち、彼女の中から何が消え、何が生まれたのか、そのことを探ると、彼女の死の理由はもとより、彼女の生の全貌をも改めて知ることができるのではないかと思う。

---

<sup>36</sup> 三毛「説給自己聽」『傾城』1985年